

【かっぱかまぼこ】

ぼくたちの小学校の仲間うちでは、蒲鉾（かまぼこ）は魚であるという認識でしたから、よく「蒲鉾論争」なるものが起こりました。

山田くんは、
「板を上にして泳ぐ」
といいはるし、田山くんは、
「板を下にして泳ぐ」
といいはる。
ぼくは、
「うえにしたり、したにしたりして、およぐ」
という意見でした。

ある日、
「それなら、本人にきいてみよう」
ということで、懐爺にきいてみると、中川に【かっぱかまぼこ】がいるとのこと。
とりあえず、代表として山田くんと田山くんとぼくとで行くことにしました。
たぶんあらかじめ、懐爺が手配してくれていたのでしょう。
ぼくたちが中川に着くと、気味のわるいおやじが待っていました。
「おまえが、かまぼこかい」
ときくと、
「あっしは、【かっぱかまぼこ】、だから、背中に板を背負っているでしょ」
たしかに、背負っているというよりは、貼り付いていて、ちょっと河童の甲羅（こうら）に似ています。
「なるほどのう、それで【かっぱかまぼこ】かい」
「おぼけの名前は、わかりやすいことが肝腎（かんじん）でしょ」
「やっぱし板は上じゃろ」
と山田くん。
「やっぱし板は下じゃろ」
と田山くん。
すると【かっぱかまぼこ】は、
「泳ぐ時かい。自由形なら、板は上、背泳ぎなら、板は下ってことになるな」
「わしが、あたりじゃ」
ぼくが右手を突き上げると、【かっぱかまぼこ】は、困惑の表情で、
「じつは、あっしは、金槌（かなづち）でして」
「かなづちたあ、およげん、てえことかのう」
「大当たり。あっしは、【かっぱかまぼこ】になって半世紀、泳ぐ練習だけは何度も何度もやっているんだが、さっぱり泳げない」
「げっ」

と山田くん。

「ぐひ」

と田山くん。

そこでぼくは、こうききます。

「そのれんしゅうは、どうやって、やるのかのう」

「つまり、板が上か下かってことかい。そらあ、決まっているでしょ、板は縦か横だよ」

「たてかい」

と山田くん。

「よこかい」

と田山くん。

すると【かっぱかまぼこ】は中川に入って、

「ほら、こうして立って泳ぐと、板は縦。ほらほら、こうして傾いて泳ぐと、板は横。文句あるかい」

文句はないが、ぼくたちは二の句がつけませんでした。

啞然（あぜん）として見ていると、【かっぱかまぼこ】は、言葉どおり泳げないので、水の中に沈んでしまいました。

しばらくして、川面にぼっかり浮かんできた【かっぱかまぼこ】の溺死体（できしたい）は、板を上にしたり下にしたりにして、下流のほうへ流されて行きました。

ぼくは右手を突き上げて、

「わしが、あたりじゃ」

と叫びました。